

<研究ノート>

# 英語教員の可能性 —学生の多様なニーズに応えるために— Teachers Must Be Flexible —In Order To Meet the Diverse Needs of Students—

中村 博文<sup>1</sup>

## 要 旨

最近、わが国の大学生の学問志向が従来とかなり変化し、かつて人気のあった大学の学部・科を志望する学生数が減少する傾向を見せている。更に、少子化により学生数が益々減少し、廃部・科に追いやられた結果、厳しい経営難に直面する大学も少なくないだろう。対応を迫られる大学側は、改組転換を繰り返し、変化した学生のニーズに応えるため新たな学部・科の新設を余儀なくされている。それとともに、従来の担当教員も事態の急転換に臨機応変に対応せざるを得ない。自分の学問的な専門領域に固執することなく、より視野を広げ自分の新たな可能性にフレキシブルな態度でチャレンジする必要がある。

キーワード：英語、英文学、異文化、住まい、環境  
English, Literature, Interculture, Dwelling, Ecology

## (序)

平成21年度千里金蘭大学短期大学部生活文化学科2年生は、短期大学部廃科にともない最後の学年となった。そもそも短期大学部には、英文科、国文科、生活科学科の3学科があったが、志望学生数の“激減”とかで英文科、国文科が廃科となり、生活科学科の中で新たに生活文化学科が作られ、英文科や国文科の担当教員までもが、その中に押し込まれたような形になった。無論、彼らの特性を生かされるような工夫も多少は施されていて、従来の生活科学科のお家芸が最も強く感じられる生活文化コースを始め、国文科系の日本文化コースそして、英文科系の国際文化コースという3つのコースが設けられていた。

この科に学ぶ学生たちの必修科目のひとつに生活文化論があるが、短期大学部スタッフの話し合いで、生活文化学科の三つの柱となっている、生活学、日本文化、国際文化をそれぞれ専門の教員が担当する、いわゆるオムニバス形式とした。15回の授業を3人の教員がそれぞれ5回ずつ担当し、自分の専門とする分野の充実した講義を行うことがその目的である。

私は元来英語担当であり、授業では英文講読、英作文、英文学史などを担当していたので、ここでは国際文化にまつわる授業を行うことに決定した。

生来幅広く柔軟に物事を考える傾向の自分は、まさかこのようなクラスで英文講読や英作文の授業を行うわけには行かず、生活文化のお家芸により密接に関連する内容の授業を工夫することを試みた。かねてから英語圏の国のみならず広く海外渡航経験が比較的豊かであり、専門の英文学（とりわけイギリス・ロマン派詩）以外に、イギリスのガーデニング文化の洗礼を受け、ガーデニング愛好家としてイギリスの王立園芸協会（RHS）や日本園芸協会などの関係者との交流が深い、また山岳トレッキングを趣味とし、ヨーロッパ・アルプスをはじめ南米アンデスなどの登山経験もあるなどの自身のメリットを、国際文化という観点から極力学生の興味を惹くように方向付けることを意識しつつ、5回分の講義ノートを苦心の末作出した。5回の授業のそれぞれにサブタイトルを付け、以下の資料を配布しつつ講義を進めていった。尚、これらの資料は学生向けのものであり、読みの難しい漢字にはルビを付け、また学生に調べさせるための研究課題も、ときどき付与している。また、これ以外に写真などの資料も随時配布したが、ここでは紙面の都合で割愛する。

1 Hirofumi NAKAMURA

千里金蘭大学 共通教育機構

受理日：2010年9月1日

## (I)

## 第一回目：日本と外国との接触

資料1 日本は島国であり、陸上で他国と国境を接していない。ニュージーランド、オーストラリア、イギリス本島などと同じ。尤も、今から1万年以上昔氷河期で海の水位がかなり低かった頃、日本列島は、一部が大陸と接していたらしい。植物分布を見ても、中国、朝鮮に自生する植物が、わが国のとりわけ西南部にも自生が見られるものが少なくない。その時代の名残であると専門家は考えている。

→歴史年表を見ながら、わが国と海外との接触の歴史を考えよう。(年表配布)

紀元前からわが国は、中国や朝鮮と接触があった。いわゆる渡来人は、今から約2,500年前にはわが国に来ていて、水稻などの農耕にまつわる技術を伝えたようだ。紀元後、大和朝廷の時代には、更に沢山の技術集団が大陸から送られてきて、養蚕、機織、堤防の建設などの指導に当たった。逆に、わが国からも大陸に向け、労作などの目的で人間の派遣が行われていた。いわゆる生口である。やがて、遣隋使、遣唐使などが送られ、大陸との交流は益々盛んになる。日本の高僧最澄、空海も唐へ留学した。また、鑑真は苦難の末日本にたどり着き、唐招提寺を建立した。東大寺大仏開眼にあたっては、1万人以上の僧が中国、インドなどから集まったといわれている。

では、当時のわが国は西洋とは接触していなかったのか。西洋との交流の可能性は大変少ないが、当時の渡来人東漢氏、西文氏、秦氏のなかで、秦氏は甚だ興味深い。秦氏はハングル語のパダニ(海)から由来しているとも言われているが、機織に由来するという説もある。事実彼らは、わが国に養蚕、機織技術を伝えた。彼らのルーツは、中国西域辺境地帯で遊牧生活を送るチベット系、トルコ系の民族だとされているが、放浪民族たるユダヤ人も相当数いたのではないかという説もある。とりわけ、キリスト教正統派と袂を分かつネストリウス派ユダヤ人が含まれていた可能性は無視できない。ネストリウス派はコンスタンティノポリス総主教ネストリウスにより説かれたキリスト教の教義に基づく一派だが、431年エフェソス公会議にて異端とされ、その後唐の時代にペルシア人アラボンなどが「景教」として中国に伝えた。この時代の中国は、非中華由来の宗教に対して寛容であったとされている。

もし秦氏にユダヤ人が含まれていたとすれば、渡来人の中にそれらユダヤの民族が混ざり合っていたこと

は否定できない。来日した秦氏は、京都太秦周辺に住み着いたが、程近い鞍馬山の天狗伝説と何らかのかかわりがあるのでは。そもそもユダヤ人は巨大な鼻を持つことで知られている民族である。因みに、太秦に程近い蚕の社というところにある神社には、三つの鳥居をくっつけた形の特異な鳥居があり、これはユダヤの紋章に似ていることを指摘する向きもある。

→「天狗」の由来を調べてみよう。杉原たく哉著『天狗はどこから来たか』(大修館書店)は、流星・彗星などの天文学的な現象が天狗のルーツであるという考えに基づき、中国、インドなどの天狗伝説を取り上げて説得力を持たせている。しかし、天狗とユダヤ人との関連についての言及は見当たらない。

さて、歴史に残る、西洋からわが国を最初に訪れた人物は、イエズス会士フランシスコ・ザビエルである(1549年 天文18年)。彼はカトリック伝道のミッションとして鹿児島県を訪れる。その後キリスト教に感化された大名たちが、使節としてローマ法王庁を訪問。江戸時代に入った1635年海外渡航禁止令、1639年ポルトガル船来航禁止令が出され、わが国は鎖国体制に入る。幕府が鎖国を行った理由は、ポルトガル、スペインの覇権主義に対する恐れであったとされている。両国は、キリスト教主義のもとに南米に植民地を築き、インカ、アステカなどの民族を滅ぼしている。江戸幕府は、日本古来の神道を盾にして、キリスト教の伝来に対抗した。そもそも神道は皇族・公家にまつわるものであり、徳川家は「公家衆ご法度」により皇族達を権力の世界から学芸の道へと追いやっていった。しかし、この場にいたり、キリスト教排除のため「神国」の担い手天皇を再び担ぎ出した点は興味深い。

## →ガリバー旅行記の中の日本

ガリバー旅行記(Gulliver's Travels)の作者ジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift)は、18世紀アイerlandの風刺作家である。主人公の船医ガリバーの船が難破し、小人、大男、馬などの国に漂着するエピソードはよく知られている。更にガリバーは日本も訪れ、時の将軍は彼と接見する。作者スウィフト自身は日本を訪れたことはなく、イギリス人でオランダ人航海士として日本に漂着し、家康の側近として仕えていた三浦按針(W. Adams)の『パーチェス巡国記』(1625)、モンタヌスの『日本誌』(1670)、そして医師ケンペルの『廻国奇観』(1712)、『日本誌』(1727)を下敷きにして書かれたと考えられる。

＊ガリバーの上陸する港は、Xamoschi ザモスキ  
これは観音崎 (Kannonsaki) ではと言う説が有力。  
筆記体で書けば良く似る。

＊ガリバーは、「踏み絵」を激しく拒む。当時、鎖  
国の日本と唯一貿易を許されていたオランダは、プロ  
テスタント国であり、たとえ踏み絵を踏んでも、商売  
が出来れば問題ないという方針だった。作者スウィフ  
トはカトリックであり、オランダのこのような政策に  
批判的であった。数々の風刺が登場するこの作品で、  
ガリバーが日本を訪れる場面こそ、作者が最も強調し  
たい部分であったのでは。これは当時のイギリスのオ  
ランダ観を示しているとも解釈できる。ガリバーが訪  
れる他の国は全て架空の世界だが、日本だけは実在す  
る国である点も興味深い。

参考文献：Maurice Johnson, Philip Williams, 北垣  
宗治著 *Gulliver's Travels and Japan* 1977 同志社大  
学 Moonlight シリーズ。

## 日本語の中の英語

現代は横文字文化で、日常会話の中に西洋語とりわ  
け英語をやたらに登場させるのが主流のようだ。

→現代日本語の中の英語由来と思える横文字を探し  
出そう。

明治時代の開国とともに外国語はどっとわが国に流  
入し、それが日本人の耳に聞こえたように表記された。  
メリケン粉、ハイカラ (high collar)、セビロ (Savile  
Row)、ドンゴロス (dungarees)、メリヤス (medias)、  
ハヤシライス (hashed meat and rice) など。では明治  
以前に日本語に流入したヨーロッパ語はないのだろう  
か。以下に一例を挙げる。

旦那：ダンナ サンスクリット語のダーナから由  
来。「与える」「施す」の意。英文法与格 dative もラ  
テン語 dativus から由来。英語、ラテン語を含めたイ  
ンド・ヨーロッパ語族のルーツに、PIE (Proto Indo  
European) という言葉があったと言われており、そ  
れはサンスクリット語にも近いものであったという  
説が存在する。サンスクリット語は、中国語に影響  
を与え、やがて一部は日本語にも入ってきたのでは  
なかろうか。

犬：音読みではケン。ラテン語は canis。音が似て  
いることに注意。ヨーロッパ各国語では、cane (イタ  
リア)、dog (英語)、Hund (ドイツ)、perro (スペイ  
ン)、σκυλος (ギリシア) と様々に変化するが、  
これはヨーロッパ各国語が似たような語族に属しな

がらも、歴史の中で異民族に侵略されその民族の言  
葉が取り込まれたなどの理由によるものだろう。

米：comedo (ラテン語＝食べる)、comer (スペイ  
ン＝食べる)

寺：terra (ラテン語＝土地)、territory (英語＝領  
土) 寺銭などの語源では？

火：fire (英語)、Feuer (ドイツ語)、feu (フラン  
ス語) 日本語でも「火」はホと発音することもある。  
別府には火売神社がある。Fの発音が共通して  
いるのは単なる偶然なのか。

→日本語の文字の歴史を調べてみよう。

中国からもらった漢字以前に、日本固有の文字はな  
かったのか。神代文字やアビル文字などは贋作だとす  
るのが、正統派の学者たちの意見だが。

第1回目の講義では、日本と外国との接触を歴史的  
にたどった。日本の近隣諸国との交流は古くから行わ  
れていたが、ヨーロッパとは室町期以後というのが定  
説である。しかしそれよりずっと以前からの交流の可  
能性を、正統派の歴史家からみればかなり突拍子無く  
思えるかもしれないが、ユダヤ人や天狗の例を引き合  
いに出しつつ学生の興味を惹こうとした。更に、『ガ  
リバー旅行記』で主人公が日本を訪れるエピソードを  
紹介し、カトリック信者である作者スウィフトの、プ  
ロテスタント国オランダに対する考え方を紹介した。  
最後に日本語の中に取り入れられている外国語のいく  
つかの例も取り上げ、その意外性に驚かせようとつと  
めた。

## (Ⅱ)

### 第二回目：住居の西洋と日本

資料 私たちがヨーロッパの家をイメージするとき、  
先ずあちらでは靴を脱がずに家中を歩き回るとい  
うのが思い浮かぶ。尤も最近はヨーロッパでも東洋  
(とりわけ日本) ブームとかで、やたらに日本の文化が紹介  
され、新築の際畳の間を作り、靴を脱いだ居間でく  
つろぐ家庭も珍しくない。海外では、例えば宗教施設に  
入る際、履物を脱がねばならない場合が多く(イスラ  
ムの寺院では常識)、これは寺院を聖所というイメ  
ージで神聖視している表れである。他に、ロシアの博物  
館入館のとき、館内にホコリ類をもち込まないように  
するため土足厳禁になっている場合が多い。面白いの  
はアメリカのグランドキャニオンで、谷底まで1,500  
メートルは落ち込んだ断崖に張り出した強化ガラスの  
橋を、観光客は裸足で歩かなければならない。靴底に



こびりついた小さな砂がガラスを傷つけ、それがきっかけでガラスにひびが入り客が谷底へ墜死するのを防ぐためだそうだ。イギリス20世紀の代表的作家の一人E.M.フォスターの『インドへの道』では、イギリス植民地時代のインドを訪れたイギリス人の婦人が、イスラム寺院で靴を脱ぐシーンがある。他のイギリス人は土足のままで寺院に入り、それが結果的に靴を脱いだ婦人への現地人の信頼を増加させることになる。ニューヨークの世界貿易センタービル爆破事件後、ワシントン市内のイスラム寺院に赴いたブッシュ大統領は、寺院入り口で靴を脱ぎイスラム教に敬意を払ったといわれている。

わが国の家では、入り口のドアまたはひき戸を開け玄関に入ると、先ず土間がある。そこで履物を脱ぎ上に上がるのだ。玄関の廊下は一段高くなっていて、「上がる」という行為をいやがうえにも象徴する。仮に客が土足のままで廊下に上がるとなれば、その客はエチケットをわきまえない無作法者とみなされる。このように、わが国の住居では「上」と「下」の区別が明確である。更に冠婚葬祭などで親類縁者が集まるとき、血縁関係の濃い薄いにより着席順まで決定されているという点も興味深い。血縁関係の薄い者が主賓の近くに着席するように勧められると、「そんな高いところに私が・・・」などと言いながら遠慮して末席に座る場面はしばしば目撃される。幼い頃の私は、なぜ「高い」のか、家の中が山のようになっていて高低差があるのかといぶかしく思ったものである。では、わが国の住居は大昔からこのように、「上」「下」が明確に区別されてきたのだろうか。

現在の和風住宅の原型は、室町時代に作られたといわれている。それ以前の住居はどのようなものであったのか。貴族階級の住居は寝殿造りが主流で、室内は畳ではなく板張りだった。室町期の東山文化の時代に（応仁の乱の頃）書院造が生まれ、畳の間が作られ障子戸や床の間などの座敷飾りも出来上がった。これは、江戸時代になり茶室の要素を取り入れた数寄屋造りへと更に発展した。他方、一般庶民の住居はどうであろうか。

→畳の歴史を調べてみよう。

近世初期に至るまで、一般庶民とりわけ農民の家は、竪穴住居に類似したものであった。つまり、土間に囲炉裏を作り、床にむしろ等を敷いた極めて粗末な住居だった。掘立柱を建てて屋根や壁は茅葺で風雨をかうじて凌いでいたようだ。江戸時代に入り経済的に豊

かになるに連れ、土間や台所を作業場にし床が作られ、食事や就寝は床上で行われるようになった。当時関西の住居の方が、江戸よりも質的に高かったといわれている。

このように考えると、少なくとも庶民の住居に関しては「上」「下」の観念は太古の昔からのものではなかったといえる。江戸時代に入ると掘立柱のみならず、梁（はり）も用いられるようになりそれらを複雑に組み合わせることで、複数の部屋の間取りが可能となり住居の建坪も大きくなった。いわゆる「田の字型」間取りである。だが江戸時代には、住居にも身分による統制が行われるようになり、一般庶民の住居に床の間や瓦葺屋根はご法度とされた。

明治時代になると住居に対する封建的規制はなくなり、稼ぎ（かいしょう）に応じ一般人でも巨大な家が建てられるようになる。また、明治の開国とともに西洋建築の技術も導入され、洋風住宅を建てる者さえ現れるようになる。無論当時、そのようなモダンな住宅には政治家、実業家など極めて少数の特権階級のみが好んで住んだ。更に時代は経過し昭和になると、和洋折衷<sup>わやうせつしゅう</sup>の住居が次第に主流となりだす。しかし室内では靴を脱ぎ畳の間で寛ぐという生活スタイルは、現在に至るまで受け継がれている。

第二次世界大戦後の瓦礫<sup>がれき</sup>の中からようやく復興し始めた日本は、やがて高度経済成長時代を迎える。絶え間なく製品の生産を続ける労働人口は都市近郊に住居を集中させ、公団住宅、住宅団地などの大量供給型住宅に住むことに憧れさえ抱くようになる。1960年代中ごろから我が大学のある千里周辺でも、千里ニュータウンの開発が始まり当時新進気鋭のサラリーマンたちは、千里のアパートで暮らし大阪都市部の一流企業へさっそうと出勤することを理想にしていたらしい。ついにながら、当時の千里のアパートでは浴室がなく、外風呂が一般的だった。やがて簡易バスユニットが発売されるようになり、とりわけホクサンバスオールの評判はよかったらしい。この件に関しては、追ってバスルームの項目を予定している。

前述したように、日本の住居には「上」と「下」の観念が根強く備わっている。土足のままで室内を自由に歩きまわれる家は、日本には存在しないといえる。更に、わが国の住居は建設の方角にも気配りが必要である。即ち「鬼門」の方向は絶対<sup>うしろ</sup>に無視できない。鬼門とは北東の方角であり、艮<sup>うしろ</sup>の方角である。陰陽道では鬼が出入りする方角であるといわれ、万事に忌むべき方角だ。因みに鬼門と反対の南西を裏鬼門といい、これ



は坤の方角である。そもそも鬼門という考えは中国から伝来したものだが、中国では家を建設する際鬼門は意識されていないと言われている。しかしわが国では、鬼門の方角への造作や移徙は忌むべきとされ、鬼門の方向に桃が植えられていた。また鬼門と反対の方向は申であることから、猿の人形を鬼門除けに祀った。

→京都御所の猿ヶ辻を調べよう。御所の北東角にあり、ここだけ折れ曲がった構造になっている。

現在の日本でも、家の中央から見て鬼門に当たる方角には、門、蔵、便所、風呂などを作らない。またたとえば、折り合いの悪い人物を「あいつは鬼門だ」などと言い敬遠する。因みに京都御所から見て鬼門の北東方向に比叡山があり、そこには延暦寺が建てられている。また、裏鬼門の方向に石清水八幡宮が置かれている。

西洋には鬼門という考えはない。しかし、その土地の地霊 (genius loci) の通り道として生垣の一部を切り開くといったおまじないは、イギリスを始めとして各国に存在する。

以上、日本の住居について概観した。次にトイレ、キッチン、バスルームの3つに絞って、西洋とわが国とを比較してみたい。

## トイレの西洋と日本

添付資料として、便器メーカー東陶の写真入「便器の歴史」を配布し、図を見ながら説明する。

トイレの西洋と日本に関してとりわけ私の興味を惹きつけた事柄がある。それは公衆トイレである。特に観光地や山小屋のトイレ事情を少し考えて見たい。

まず始めに、公衆トイレはどのように発展したのだろうか。ヨーロッパでは19世紀中葉から公衆トイレの整備が始まる。それ以前には糞尿の処理が適切でなく（各家庭に溜められた汚物が道路にまかれていたという）、極めて不衛生で時には伝染病の発生源にさえなった。トイレの整備が始まり、例えばパリにはエスカルトと呼ばれる公衆トイレがあちこちに設けられた。

わが国では江戸時代末まで、長屋には共同トイレがあった。その糞尿は化学肥料などない当時、農作物の貴重な肥やしであり、長屋の大家は溜まった糞尿を百姓に売り、結構な実入りがあったらしい。神社仏閣には「トイレ屋」が営業する公共トイレが設けられ、参拝客の糞尿で相当稼いでいたと言われている。明治時代になり港町横浜では、早くも明治4年に「放尿取締りの布告」なるものが出された。港に上陸する外国人に好印象を与えるために「立ちション」を禁じ、違反

者には罰金100文が科せられたという。そして83箇所「路傍便所」が作られた。それは4斗樽を地面に埋め込み、板で囲った簡素なものだった。

従来の日本の公衆トイレは「汚い、暗い、臭い、怖い」という4Kから成り立っていた。この4Kとか3Kという表現は今では人口に膾炙しているが、そもそもトイレを言った言葉である。しかしここ10年で日本の公衆トイレの事情は様変わりしたようだ。汚く落書きだらけの駅のトイレは、概して近代的で衛生的なものに作りかえられたし、デパートでは豪華トイレをウリにしているかのように思える場所さえある。また郊外の観光地でも客寄せの一つとして、場所柄取って付けたような豪華版トイレを自慢するようになった。世界の先進国ではトイレ協会が作られ、わが国にも「日本トイレ協会」が1985年に作られた。これには建築家、デザイナー、環境問題のスペシャリスト、便器メーカー、清掃会社などがメンバーとして参加している。

さて、乗り物の中のトイレはどうだろうか。都市近郊の乗車時間が比較的短い区間には、トイレ付き列車はほとんど見られない。しかし主としてJRの中遠距離列車には必ずトイレが取り付けられている。かつての日本では列車内トイレは垂れ流し式であり、直接線路にばら撒かれていた。用便中便器の下に線路が見えていたものである。だが、トンネル走行中にばら撒かれる糞尿は霧状となり舞い上がり、開いている窓から遠慮なく客室内に入り込んできたのだ。この件について医学系大学で調査された報告も少なくない。要するに、垂れ流し式トイレを取り付けた列車の車内は不潔極まりなかった。やがて全国的な列車トイレの改良が始まり、新幹線は言うに及ばず在来線を走る列車でも、新たに製造された車両にはタンク貯留式トイレが取り付けられるようになった。ただし、帰省ラッシュ時の臨時便などでは、旧車両が未だに用いられることがあり、その中には垂れ流し式トイレの車両も少なくない。JR駅で列車待ちをしているとき、線路の枕木に大便がこびりついているのを今でも時には目撃する。これは保線係の人たちの労働条件にも悪影響を与える。

→貯留タンク式トイレの列車と垂れ流し式トイレの列車の割合を探り出そう。

話は変わり、かねてから山岳トレッキングを愛好する私は山小屋に宿泊することが大変多く、山小屋のトイレに関心を抱いていた。特にスイスの山小屋のトイレはほとんど全てが水洗式で大変清潔に保たれており、利用者は好感を持つことが出来る。他方日本の大部分の山小屋では垂れ流し式トイレであり、前述した4Kを

地で行くような不潔極まりない場所という印象を受ける。水や電気の供給が乏しい山岳地帯では、水洗などと言う気の利いたトイレは期待できない。無論、幸運にも水が豊富な沢沿いに建つ一部の小屋では、沢の水を取り込み「水洗」まがいの糞尿処理を行っているところもある。そのような小屋には浴室さえある。しかし、3,000メートル級の尾根筋ではほとんどの場合宿泊することが精一杯となる。概して山小屋のトイレは不潔で悪臭が周囲に漂い、素晴らしい山の自然とは裏腹にトイレだけは地獄である。そのために二度と山に来たがらない登山者もいるらしい。

他方ヨーロッパアルプスでは、山小屋のトイレはほぼ完璧なまでに整備されている。例えば、スイスヴァリス州ツェルマット（マッターホルンの山麓）から登山電車で約45分上がった標高3,100メートル付近に建つゴルナーグラートクームホテルは、周囲360度に4,000メートル級の高山が展望でき、その見晴らしのよさなどから世界的に人気のある観光スポットになっている。このホテルの場合、水はツェルマット村からポンプでくみ上げ、排水やトイレの汚水は専用パイプで麓まで送られ、ツェルマット村で高級処理されている。村からホテルまで直線距離は約9km、標高差は1,485メートルである。その間は30cm径のPVCパイプで結ばれている。従ってこのホテルにはシャワールームがあり、水量は豊富で各部屋では水道水も得られ飲料水として適している。またトイレは水洗式で、豊富な水量のため使用中不自由は全く感じられない。標高3,000メートル以上の場所で宿泊客は、都市ホテル並みのホスピタリティーを得ることが出来るため、ここ数年このホテルは世界的な人気スポットになっているらしい。私もしばしばこのホテルに宿泊するが、いくらでもリピートしたい気が生じてくる。

スイスには他にもヒュッテと呼ばれる山小屋が沢山あり、ほぼ全てのホテルのトイレは水洗式である。ツェルマットに近いクラインマッターホルンの空中ケーブル駅（標高3,884m）は、周囲を氷河で囲まれているため下水道を引くことが出来ず、排便のたびに便器内に設置されているビニール袋に便を入れ、使い終わると同時に袋の口を自動的に閉じてしまいトイレの下方へ落とし込む方式の、EMERGIEと呼ばれるトイレを用いている。便の入った袋はかなり溜まれば、集めて下の村へ下ろすようだ。ちなみにこのトイレは有料である。これとて使用中不快感、不潔感を感じることは少ない。このようにスイスの山小屋は、トイレに関しては大変快適である。マッターホルンの標高4,000

メートル付近には緊急避難用の無人小屋ソルバイヒュッテがあり、さすがにここだけは水洗が不可能であるため、北壁側に張り出した便器で1,000メートルほど下まで便を落下させる。

→今井通子著『マッターホルンの空中トイレ』（TOTO出版、1995）

環境問題がうるさく叫ばれている昨今、日本の山小屋のトイレの改革も真剣に取り組まれていて、目下のところ以下のような試みが行われている。

\*排泄物を浄化槽でとことん浄化し、全く「無害」になった状態で野に帰す。だがそのためには太陽光発電や風力発電によるエネルギーが必要となり、浄化プラントなどと併せばく大な費用がかかる。個人経営が主体となっているわが国の山小屋の場合、実現は大変難しい。

\*宿泊客が排泄物を持ち帰る。既に一部の山小屋では実施されている。環境を護るためとはいえ、自分のウンチを袋詰めにして家まで持ち帰らなければならない点に、抵抗を感じる登山者は少ない。環境保護は大切だが、一部の環境保護団体のこのような極端なやり方は余りに過激すぎる。

谷川沿いの山小屋の場合立地条件に恵まれ、豊富な水を取り込み「水洗」トイレを作り排泄物はタンクに詰めて登山シーズンの最後に、穴を掘って埋めるというやり方が主流であったが、辺りにトイレトーパーなどの乾燥したものが一面にこびりつき、景観を著しく損なうというクレームが絶えない。富士山の某山小屋周辺には、木々の枝に白い紙切れがこびりつき、恰もおみくじを結わいつけたかのようなのだが、実はトイレトーパーだったという報告もある。このようなことを防ぐには、登山者が各自の排泄物を自分の責任で持ち帰る以外にないのだろうか。

ヨーロッパの山小屋は完全予約制で、飛び込み客は宿泊できない。他方わが国の場合、登山者の安全のため宿泊希望者は必ず泊める。そのために山小屋利用者数は、スイスの山小屋をはるかに上回る。それらの登山客の排泄物の量は？ 因みにスイスの場合、山小屋のトイレに必要な経費は全て地元でまかなわれている。連邦政府からの援助は必要とされていない。宿泊者数が制限されているからこそ、これが可能ではなかろうか。

第二回目の講義では、住居の異文化という点から授業を進めた。とりわけ、わが国の住居では「上」と「下」という観念が大変重要であり、それが現在の日

本人気質にいかなる影響を与えているかを探り出すことに力点を置いた。また、トイレに関して、とりわけ山小屋のトイレを、環境保護の観点からスイスとわが国とを比較してみた。更に住居の説明に当たり、お膝元の千里ニュータウンを身近な例として取り上げ、学生の関心を高める努力をした。

### (Ⅲ)

#### 第三回: 風呂の異文化

資料 草津よいとこ一度はおいで ハードッコイ  
ショー お湯の中にも コウリヤ 花が咲くよ チョイ  
ナチョイナ

これは、草津節の一番目の歌詞である。草津を訪れる湯治客、観光客が次々に歌詞を作り、現在では30番以上の歌詞が出来ているようである。元来草津では、「時間湯」という入浴療法があり、これはかなり高温(48°C)の湯の中に限られた時間入浴するというものである。源泉はそれより更に高温であり、長い板で湯をかき回し温度を下げる。これが湯もみであり、そのときに歌われるのがこの草津節だ。湯もみは湯治客自身が行い、それが入浴のための準備運動も兼ねている。また、唄いながらの湯もみ作業により、湯気の吸引も行われ、それは治療に効果的だといわれている。草津温泉は古くから湯治場として知られ、明治時代にはベルツ水で有名なドイツのベルツ博士が草津の湯の効能を研究し、草津には彼の胸像が立てられている。

日本人は風呂好きで、また火山国で温泉にも恵まれているため、独特の温泉文化が存在する。ここでは、ヨーロッパと日本の風呂、温泉を比較してみる。

ヨーロッパにも温泉は存在する。イギリスのロンドンから南西部にBathという土地がある。14世紀の大詩人Geoffrey Chaucerの*Canterbury Tales*に「バースのかみさんの話」というエピソードがある。バースとはこのBathを指し、それはまた「浴室=bath」の意味も持つ。すなわち、このBathは古来温泉町であり、イギリスがローマ帝国の一部であった頃、ローマ人がバースにローマ式風呂を建設した。現在でも温泉の湧出があり、ローマ式風呂は世界遺産にも登録され、古代遺跡として観光客が絶えない場所である。

ローマ式風呂とは、主としてバルネアとテルマエの二つに分けられる。バルネアとは、冷—暖—熱—暖—冷と徐々に暖め、また徐々に冷やす。入浴者は脱衣し、木製のサンダルをはき油の容器、洗面具を持ち冷氣室に入る。次に温暖室に入り、ここで体を洗いオイルを

塗る。次は高温室へ。サウナ式であり、50°C程度あったのではといわれている。また、室内に湯の入ったバスタブがあり、これにも浸かる。更に、冷水を入れた水盤もあり、入浴前に人はこの中で体を洗った。いわば「かかり湯」である。バスタブの湯は溢れ出んばかりで、浴室全体の湿度は相当高かっただろう。高音室の次は熱気浴室で、80°C程度の熱さで入浴者はたっぷりと汗を流した。その後更に暖温室へ向かい、オイルを塗る。最後に冷氣室に戻り、身体を冷ました。この冷氣室の浴槽は、その後水泳プールへと発展した。尚、湯は温泉から引いたものではなく、川から引いた水を加熱したものである。

他方、テルマエとは、紀元前1世紀ごろ、バルネアから発展したといわれている。最も古いテルマエは、古代ローマのアグリッパ大浴場である。長さ100メートル以上、幅80メートル以上もの大きさで、たびたび改修されつつ5世紀まで使われていた。紀元後64年にはネロ大浴場が、3世紀には最も有名なカラカラ大浴場が作られた。これは12万平方メートルの広さを誇り、1,600人が同時に入浴できた。これらの浴場内には、ボクシング、レスリング、ウエイトリフティングなどのスポーツ施設が作られ、劇場、図書館、飲食店も併設された。いわばカルチャーセンター的な様相を帯びていたといえる。古代ローマの大水道で送水される水のうち40%は、噴水や風呂用に使われていた。

イギリスのバースにも、そのような古代ローマ式の温泉の遺構が見られる。それは大衆浴場であり、一度に大勢の入浴者が大きなホールのような浴室で沐浴した。イギリスから更に北方に浮かぶアイスランド(Iceland)は、文字通り氷の島であるが、同時に火山の活動が活発で火の島でもある。この国では火山国の利点を生かした地熱発電が盛んで、環境問題がうるさい昨今、クリーンな発電は世界中から注目されている。このアイスランドでも、温泉は入浴用に盛んに利用され、巨大な温泉プールが作られている。アイスランド国民の温泉に対する関心は高いといえる。ヨーロッパ大陸の温泉事情はどうだろうか。ドイツでは風呂はBadと呼ばれ、ドイツの地名で「・・・バート」といった場所は温泉の湧出する土地である(例: Baden-Baden)。また、東ヨーロッパでも温泉地は多いが、概して温泉湯治などの医療用に使われている。このような場所では、入浴のために医師の診断書が必要で、診断書のない一般客は、かなり高額の入湯料を徴収される場合が少なくない。自国民が利用する場合、医療保険の適用が可能である。また、温泉水を飲用する場合



が多く、巨大なホール状の建物内部の壁に、沢山の蛇口が取り付けられ、人々はコップに湯を入れ飲み続ける。

以上ヨーロッパの温泉や浴場を簡単に紹介したが、日本と異なり、人々は必ず水着を着用している。わが国のような「裸の付き合い」といった雰囲気は乏しい。南半球にあるニュージーランドの特に北島は火山・温泉に恵まれ、ロトルアなどの著名な温泉地がある。だがここでも、温泉プールを楽しむ客は全て水着を着用している。

ここで、日本の風呂の歴史を少し考えてみる。日本古来の風呂には、蒸し風呂系が多く、岩風呂、釜風呂などもその中に含まれる。天然の岩窟、人工的な石組みで洞窟を作り、先ずその中で火をたく。内部が十分に熱せられると塩水でぬらしたむしろを火の上に置き、その上に人が横たわる。別府八湯の一つ鉄輪温泉には、鎌倉時代一遍上人が開いたといわれている蒸し風呂がある。ここでは、地の利を生かし温泉熱を効果的に用いている。かがんでやっと入れる程度の狭い入り口から入り、温泉蒸気が噴出する上に敷かれたマットに横たわるが、入湯の際貸し出されるタイマーを見ながら、10分程度蒸し風呂を楽しむ。あまり長時間蒸し風呂に入りつづけるのは危険である。蒸気を使わない乾式のものとはサウナと呼ばれているが、元はフィンランドの乾式のことを言った。

他方、五右衛門風呂は、湯の中に浸り入浴するタイプである。鉄製の浴槽は下から直火で熱せられるため、浴槽に直接触れるとやけどの危険がある。従って、木製の底板を入浴時に沈めて湯浴みする。これを知らず底板をすのこと勘違いし、浴室に敷いてその上を歩き回ったというエピソードがある。浴槽全体が鉄で出来たものは「長州風呂」と呼ばれ、縁は木枠、底だけが鉄製のものは五右衛門風呂というようである。かつて、わが国のとりわけ農村部ではこの風呂が主流であった。無論、現在の風呂のように自動点火ではなく薪を燃やして湯を加温していたので、ぬるい場合外で燃やしている係の人に加温してくれるように告げたものである。だが、燃料の材木には大抵スギが用いられていたため、独特の香りが漂ってきて快いものであった。

わが国の風呂には、他にドラム缶を用いたものもある。これは物資の乏しい戦時中に、兵士が戦地で使っていたものだが、最近ではアウトドアやサバイバルのマニアたちが、無人島などでこのような風呂に入り雰囲気を楽しむようである。

さて、わが国の伝統的な風呂は、蒸し風呂系が主流

であると上で述べた。事実、既に奈良時代、とりわけ寺院ではこの手の風呂が僧侶たちの入浴に用いられていた。奈良市にある法華寺には、当時の面影を伝える蒸し風呂浴場が残っている。聖武天皇の妃である光明皇后直々に、らい病 (Dr. Hansen's disease ライ病という病名は、この病にまつわる過去の暗い歴史を想起させるため、現在ではハンセン氏病と呼ぶ) 患者を湯浴みさせ体を流したといわれている。平安期には公衆浴場なるものも登場している。更に、鎌倉時代、室町時代と移り変わるにつれ、「町湯」と呼ばれる浴場が出来た。江戸時代の少し前天正19年に、江戸の銭瓶橋に伊勢与一という人が風呂屋を開き、これが最初の銭湯だとされている。無論この風呂は、伝統的な蒸し風呂だったようである。その後江戸末期まで日本の風呂は蒸し風呂が主流を占めたが、やがて戸棚風呂と呼ばれる混浴が生まれた。この風呂は膝までを湯に浸し、上半身は湯気で蒸すというタイプだった。何せ蒸し風呂という性質上、浴室から蒸気を逃がさない工夫が施されていた。つまり、湯船の前を天井から床まで板でふさぎ、「ざくろ口」いう狭い入り口からのみ入れるようにされていた。石榴の実から採った酢は鏡を磨く際に用いられていた。従って、「鏡磨き」と「屈み入る」とのシャレで生まれたらしい。

このざくろ口は、中が真っ黒でしかも混浴のため、内部ではしばしば卑猥な行為も行われていた。やがて慶長年間には、「据え風呂」と呼ばれる、桶一杯に湯を満たすタイプの浴槽が出来た。この頃から、湯屋には「湯女」と呼ばれる、客の垢を流す女性が登場した。しかし、夜間湯女は一見客を断り、遊女のような接待を行ったため、湯屋の風紀は益々乱れていった。とうとう天保年間に、江戸幕府から禁令が出て、湯女風呂は強制撤去されてしまった。湯女たちは、吉原に移動させられたのである。

明治維新により外国人がわが国を訪れるにつれて、銭湯も大きく改善されていた。東京、大阪など大都市周辺の銭湯では、いち早く混浴禁止令が出されたのである。概してキリスト教国は、大衆浴場における男女の混浴に対し、風紀が乱れるなどの理由で極めて批判的である。当時の銭湯は、浴槽の縦横10尺 (約3m)、深さ4尺 (約1.2m)。そして、男女別々に入浴。午前6時か7時ごろ屋根に旗が揚がるのが風呂が沸いた印で、番台で入湯料を払い、浴室内では町民たちの様々なコミュニケーションが行われたのは、現在と同じである。

日本では、「湯に浸かる」とか「湯浴み」という表現がしばしば用いられている。いずれの場合でも、「湯」

というずばりの言葉が日本語には備わっていることの意義は大変大きいと思える。英語で「湯」は、hot water というが、cold water, hot waterと並べると、water「水」の状態が熱いか、冷たいかを単に表現しているに過ぎないようだ。これではわが国の「湯」の文化などという雰囲気はうまく伝わらない。中国でも日本的な意味で「湯」が使われているようである。白楽天の長恨歌で有名な、楊貴妃が入浴した「華清池」には、「湯」が湧いていたという。中国にも「温泉文化」が古くから存在していたようだ。日本では、地域、職場などのコミュニティ内部の人間が温泉旅行を行い、共に入浴することで「はだか」の付き合いがスタートし、それは地域や職場の連帯感をより一層強化することにつながる。最近では、体によくないため禁止されているようだが、湯船に浸かり、酒の徳利を傾けあうことさえ行われていた。とにかく日本人は、浴槽にどっぷりと浸からなければ満足しない。シャワールームだけでは「ほっこり」とした気分は味わえない。

ヨーロッパでは、超一流ホテルでさえ、シャワールームのみとなっている場合が多く、現地人からは全くクレームは出ない。しかし、日本からの観光客はゆったりとしたバスタブを期待しており、その期待が外れると添乗員に猛烈な八つ当たりが来る。最近、日本の航空会社経営のハイソなセレブ向けの高級ホテルが海外にも建設されるようになり、無論そのようなホテルでは各室にバスタブ付浴室が設けられている。では、なぜ日本人はバスタブにどっぷりと浸からなければ満足しないのだろうか。入浴という行為が、単に体にこびりついたゴミを洗い流し清潔さを維持するためだけに行われるならば、シャワーを浴びるだけでも目的は達成できる。しかし、湯船の中にしっかりと浸かるということは、体の芯まで湯温が伝わり、結果的に体調の改善も期待できる。これは健康上も望ましいことである。

### わが国の温泉の歴史

温泉や風呂について考えてきたが、参考までに日本の温泉でとりわけ古い温泉を紹介する。

最も古い温泉は、白浜温泉、有馬温泉、そして道後温泉である。この3つは「日本三古湯」と呼ばれている。有馬温泉は、631年<sup>じょめい</sup>舒明天皇が3ヶ月滞在した記録が日本書紀に見られる。その後奈良時代には高僧行基が温泉寺を建立。「枕草子」にも有馬温泉への言及がある。白浜温泉には、658年齐明天皇、690年持統天皇、701年文武天皇が訪れている。ちなみに、有馬温泉や白

浜温泉は、いかなる火山帯にも属さず、にもかかわらず高温の湯が出るのは謎だと言われてきた。しかし近年の調査で、太平洋から潜り込んだプレートから滲出した高温の地下水によるものであることが明らかになった。

最後に道後温泉について。この温泉は、わが国最古の温泉だといえる。3,000年以上の歴史を持ち、付近からは縄文時代の土器・石<sup>せき</sup>鍬<sup>ぞく</sup>が出土している。昔深手を負った白鷺が、岩間からしみ出す湯に浸っていたところを村人が目撃したのが道後温泉の起こりであるという。ちなみに白鷺はこの温泉のシンボルマークであり、各所に白鷺をかたどったシンボルマークが見出される。また、夏目漱石の『坊ちゃん』にも道後温泉は登場するが、これは松山中学の英語教師として赴任した作者漱石が、この温泉に感銘を受けたことによる。正確には道後温泉本館といい、ここは現在でも道後温泉のシンボリックな存在である。

### 家庭での風呂

現在の日本では、ほぼすべての家庭に浴室は備わっている。無論湯船はさほど広くないが、一人でプライベートな入浴を楽しむことができ、それは疲れを癒すのに大いに役立つ。だが、近所に風呂屋がある場合、わざわざ出かけて行って風呂屋での入浴を楽しむ人も少なくない。その理由は、かなり大きな湯船にどっぷりと浸れること、大勢の入浴者と世間話などの雑談に花を咲かせたいことなどが挙げられる。また、最近ではボーリング技術が向上して都会でも温泉が湧き出るようになった。桃山台には本物の温泉が営業されており、また南千里駅前のモール内には「足湯」もある。（ここは、現在営業がお休み）。水道水よりもミネラル分が多い天然温泉となると、家庭の風呂より温泉に行きたがる人が多いのは納得できる。また、そういった施設にはレストラン、居酒屋、遊戯施設などが備え付けられているので、ファミリー単位でレジャーを楽しむこともできる。温泉や銭湯は、立派な社交場なのである。

今や各家庭に必ず浴室が付いていることは上述したが、たとえば千里ニュータウン内のアパートでは、建設がはじまった当初バスルームはなかった。1960年代初めからニュータウンへの入居が始まり、ここでの暮らしは若手サラリーマンたちの憧れとなったそうだが、バスルームが設置されていないため、彼らはユニットバスを導入せざるを得なくなった。それに迎合するかのよう、ホクサンバスオールというユニットバスが

発売されたたちまち大人気となった。(別図参照) 当時のモデルは現在、吹田市博物館に展示されているという。

→千里ニュータウンの歴史を詳しく調べよう。それと同時に、吹田の歴史も大変奥深い。(例: 仙洞御料、牛頭天王、名水など) 機会を作りフィールドワークしてほしい。

第三回目の講義は「風呂」についてのもので、西洋と日本の風呂を比較しつつ、わが国の「湯の文化」を探ろうと試みた。同時にローカルな視野から、千里ニュータウン建設当時の浴室事情にも少し触れ、資料の収集のためフィールドワークを学生たちに促した。

#### (IV)

#### 第四回：台所の異文化

資料：台所の語源は、平安時代の台盤(食物を載せる脚付き台)あるいは、人間の根幹である胎盤とも言われている。英語ではキッチン(kitchen)といい、他に厨房、調理場、勝手場などとも呼ばれている。最近の台所のモデルでは、流し台(シンク、給排水設備)、加熱調理器、換気設備、作業台、収納庫が完備している、いわゆるシステムキッチンが主流である。

食物を調理する際、洗う、切る、煮炊きするなどの動作が必要となる。竪穴式住居では、住居の中央で直火による加熱調理が行われていた。煙は上昇し、木の皮や藁で作られた壁の隙間から、外へ出たと思える。しかし、調理中室内にも煙が充満していたことは容易に想像できる。また、直火の場合、燃料を燃やすことで熱気が周囲に放射され、調理者は熱さで悩まされていたはずである。やがて調理場は独立した部屋となり、直火の周囲は、土、石などで覆われるようになり、かまどの原型が出来上がった。これが台所の始まりである。

食材を加熱する場合、固定式の竈<sup>かまど</sup>は熱利用の効率が良いものの、持ち運びは不可能だったため、遊牧民族の間では普及しなかった。更に、火力調節も竈の場合難しく、例えば鍋料理を作る際、材料の仕込みは竈で行うが、実際食べる際には、囲炉裏の周囲に人々が集まり鍋をつつくという方式が一般的になった。囲炉裏であれば、鍋を火から遠ざけたり、火に近づけることで火力の調節が可能である。また、囲炉裏はストーブの役目も果たし、冬季人々は囲炉裏で暖を取ることが出来る。ともあれ、直火からかまどに代わったことに

より、調理の専門化が生じ、調理できる料理の量も大きく増え、より大勢の人々の食事をまかなえるようになった。お陰で人口の集中が発生した点で、かまどが文明を育んだ<sup>はぐく</sup>ということが出来る。

かまどの燃料は、最初木材(薪<sup>たきぎ</sup>)といったいわゆるバイオマス燃料や、炭などのバイオマス加工燃料が主として用いられていた。また、地域により石炭や、草食動物の糞を乾燥させたもの(繊維が極めて多い)が利用されていた。やがて、時代が経つにつれ、ガスを用いたガスコンロ、石油コンロ、電熱などに代わっていく。現在の日本では、かまどは時代遅れのように思えるが、古きよき時代に対するノスタルジアは強く、「かまど炊きのご飯はうまかった」といった言葉は今でも生き続けている。実際に、こだわりの料亭では、かまど炊きに徹している店が少なくない。かまどは、関西地方では、「へっつい」と呼ばれ、また京都では「おくどさん」という。かまどは神聖なものであり、人々は不浄を避けかまどの神を敬う。正月にはかまどに鏡餅飾りを行う場面は、しばしば目撃する。とりわけ、三法荒神に対する信仰が根強く残っているのは興味深い。

荒神とは、わが国の神道の伝承による荒魂<sup>あらみたま</sup>に対する信仰に由来している。つまり、人々に危害を加える<sup>なだ</sup>祟りの神に対し、畏敬の念を持って接することで、怒りをなだめようとするものである。これは、わが国に仏教が伝来後本地垂迹思想が高まり、神道の神々も仏の仮の姿であるとする考えにより、益々積極的に祀られるようになった。三宝とは、仏教で言う仏、法(教え)、僧を指し、仏教では最も尊い宝物である。その三宝を守るのが、三宝荒神である。普通その姿は、三面六臂で表される。そして憤怒<sup>ふんぬ</sup>の相を呈している。この三法荒神は、不浄を嫌うかまどの神として信仰され、かまどの上に三本のろうそくが立てられた蜀台<sup>しやくだい</sup>が置かれる。ただし、この三宝荒神信仰は、日本独自のものであるらしく、インドにはない。日本人のかまどに対する考えを、垣間見ることが出来るのではなかろうか。

→清荒神について調べよう。

海外にもかまどに似たようなものがあり、インドではタンドールと呼ばれている。インド料理の定番タンドリーチキン<sup>タンドリーチキン</sup>は、このタンドールで焼かれたものであり、またナンという一種のパンも、このかまどの内側にパン生地を貼り付けて焼く。更に、イタリアでは、かまどの中で先に薪などの燃料を燃やし、炉の内部を高熱にした後、その余熱の中で食材を調理するやり方がある。ピッツァはこのようにして焼かれる。余熱を



利用する場合、加熱しすぎて食材をこがしてしまうことが少なくなる。

### 給水と排水

台所では、材料を洗うためや茹でたり出汁を取ったりするために水が必要であり、排水・給水設備も不可欠である。古代ローマでは、水道設備が完備していて、一般家庭でも水道料金を払えば水道を引き込むことが出来た。しかし、これは極めてまれなことで、大抵の国では、井戸や川へ行き材料を洗い、飲料水を汲んだ。近くに川がある場合、台所内に川の水を引き込むことも行われたが、そのために台所は絶えず濡れていた。土間の空間が生まれたのは、そのためであったといわれている。湿気のため板張りの部屋では、直ぐに床が腐ってしまう。現在でも、日本の地方を旅すれば、とりわけ名水で有名な土地では、清水の流れる小川の水を室内に取り込み、中から水が汲めるようになっている場所がある。水は、飲料として用いる場合、衛生面で極めて清潔でなければならない。また、食器などを洗ったあとの排水は大変汚れているため、上水と下水の明確な区別が必要である。上で述べた古代ローマを除き、世界中の大部分の国では、飲料水は山の谷川などから得た清水をタンクに汲み置きしたものを用いていた。あるいは、自宅の庭に掘った井戸水も重宝されていた。水が比較的豊富に得られる場所では、野菜、果物を冷やす目的にも、水が用いられた。昔の農家では、夏にスイカをそのまま井戸の中に入れて冷やしたものである。逆に、離れ島などで付近に山がない場合、淡水を得ることは極めて困難であり、人々は雨水を溜めて用いた。例えば、地中海に浮かぶマルタ島（Malta共和国）では、岩盤で覆われた島の内部を、太古の昔から掘削し、地下に巨大なプールを作り、この中に雨水を溜めて用いている。わが国の瀬戸内海の島々でも、かつては雨水を用いていたが、最近ではパイプで本土から取水しているようである。雨水の場合、いわば蒸留水のためミネラル成分が乏しく、そのためにミネラル不足になる危険もある。

各家庭から毎日出る台所からの汚水の量は相当なものになり、その処理は深刻な問題である。かつてのようにそのまま川に流せば、全国の河川はたちまち汚染されてしまう。都市計画が行き届いた最近の住宅地では、汚水は下水管を通して処理場へ送られ、そこでほぼ完全に処理される。処理後のきれいな水で、蛍の幼虫を飼育していることをウリにする町もある。しかし、それだけでは完全ではないと、各家庭で合成洗剤では

ない石鹼を用いることを奨励したり、古い油は、「ゆっこ」などで固めて、ゴミとして出すような指導も行われている。決して下水として油を捨ててはいけない!!

しかし他方、例えばマヨネーズの容器は、中にこびりついたマヨネーズを何度も水でゆすいでから、プラスチック容器を捨てるように指導されているが、このゆすぎ水を下水として捨てれば、またもや河川は汚れる。ではどうすればいいのか? トイレは言うに及ばず、台所もしばしば汚染物質の発生源となるため、キッチンを考える際エコロジーを無視することは出来ない。

### 食物の保存—冷やすこと

現代では、冷蔵庫が余りにも普及したため、例えば真夏に冷えていないビールやジュースを飲むなどということは想像出来ないだろう。私が幼い頃、ようやく缶ビールが日本で製造され始めた当初、都心から離れた観光地ではアイスボックスなどまだ存在せず、大人たちは売店で冷えていない缶ビールを買いうまそうに飲んでいた。食べ物を冷やすという行為は、やはり食べ物を扱う台所と関連するため、ここで冷蔵庫について少し考える。

冷蔵庫は、現代の台所では必要不可欠なものとなったが、冷蔵庫は一体いつごろ出来たのだろうか。ヨーロッパでは既に1748年、スコットランドのウィリアム・カレンという人が、エーテル気化熱を発見している。更に1820年マイケル・ファラデーが、液化アンモニアによる冷却を発見。1834年には、アメリカのジェイコブ・パーキンスが、エーテルを用いた製氷機で特許を取得。その後、ビール業界などでは冷蔵庫が実用的に使われ始めた。1911年には、アメリカGE社が、家庭用電気冷蔵庫を試作。徐々に冷蔵庫は普及していく。1923年三井物産がアメリカから冷蔵庫を初輸入。1927年日立製作所が日本製電気冷蔵庫を試作成功。1930年GE社の研究所でCFC（フロンガス）を発見、「フレオン」と命名され商品化された。（「フロン」というのはダイキン工業の商品名）。1933年、芝浦製作所（現東芝）が、「電気冷蔵庫」という名で本格的に発売を始めた。しかし、極めて高価だったため、1950年代まで一般には普及しなかった。わが国の一般家庭では長らくの間、上部に大きな氷を入れ、その冷気で冷やすタイプの保冷箱のようなものが用いられていた。無論これでは製氷は不可能で、常温よりは少し冷える程度だった。当時、町には「氷屋」という商売があり、契約すれば夏季の間毎日氷を届けてくれたものである。冬季は氷が不

要となり、「氷屋」は「炭屋」に転職したという。

戦後のわが国が高度成長時代を迎えるに当たり、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫は三種の神器といわれるようになった。やがて冷蔵庫に改良が重ねられ、自動霜取り機能、マルチドア化、また400リットル以上の大容量化も実現した。また、環境問題への配慮から省エネルギー化も真剣に取り組まれ、インバータなどの開発によりかなり消費電力が減らせるようになったと、メーカーは述べているが、結露防止装置、自動製氷機などに消費される電力は無視できず、結局従来のタイプと比べ、さほど省エネになっていないという意見もある。

では、冷蔵庫が発明される以前に、人々はどのようにして食物を冷やしていたのだろうか。日本各地には、「氷室」という地名が沢山ある。これは、昔水銀を採掘していた土地にちなむ「丹生」という地名が多いのと類似し、氷を保管する室があったことによる。氷室とは、冬季池などに出来た氷を切り出し、自然の洞窟や人工的に石組みなどでこしらえた岩窟内にその氷を閉じ込め、夏まで保存するというものである。大阪と奈良の県境にある飯盛山には、「室池」という巨大な池があるが、江戸時代冬季にできたこの池の氷は、切り出されて氷室に保存されていたようだ。ちなみに、奈良県下には氷室という地名が沢山あり、古くは日本書紀でも氷を保存した氷室への言及はある。このようにして夏まで保存された氷は、一般庶民の口にするものではなかった。当時の氷は、将軍家や朝廷のやんごとなき人々にのみ供されていた。奈良で出土した長屋王の木簡には、「都祁氷室」と書かれたものがある。氷室には、それを管理する職（主水司）があり、それは明治時代まで続いた。江戸の町には、土蔵造りの氷室が市中に作られていたようで、この氷は一般庶民にも供給されていた。江戸の町は比較的水道施設が発達しており、玉川上水から飲料水が供給されていたが、夏場には生ぬるくなってしまう。そのため、氷で冷やした水を売る「氷屋」という商売まで存在していた。だが、上水といっても川から引いた水に過ぎず、衛生面でかなり問題があったことは否定できない。抵抗力の弱くなった高齢者は、しばしばこの氷水で腹をこわすことがあり、「年寄りの冷や水」という表現もここから生まれたようだ。ちなみに、金沢市周辺では、冬の間保存した氷を、6月30日に取り出し氷室開きを行う。そして、翌7月1日に氷をかたどった氷室饅頭を食べ健康を祈る。この風習は一時途絶えたが、昭和61年復活、現在も継続して行われている。江戸時代、加賀藩から将軍家に

氷室の氷を献上する慣わしがあった。また、奈良市の氷室神社では毎年5月上旬献氷祭があり、神徒の製氷メーカーなどが氷の中に魚などを入れた供物を供える。全国的には、冬季に氷室に保存した氷が夏まで解けずに保たれているかを確かめるための各種イベントが随時行われているようだ。

### 教育の場としての台所

台所は、しばしば祖父母から両親へ、そして両親から子供たちへの教育現場となりうる。「おばあちゃんの知恵」の類の、調理法、味付けなどは、台所で伝授されるのが常である。そこでは、先祖代々にわたる漬物のぬかだねが伝えられ、各家庭独自の味付けもアドヴァイスされる。日本各地に伝わるお雑煮は、場所により白味噌入り、済ましと様々で、また出汁には昆布、かつお、椎茸、更にはスルメ、アゴだしなどバラエティーに富んだ味付けが各地方により行われている。そういったものは全て台所で伝授され、子孫に受け継がれていく。食卓も台所の一部となっている場合が多いが、食卓とて親子の教育の場として重要である。食事をしながら、親が子供に説教を行ったり、子供の様々な相談に耳を傾ける。このような場面は、一昔前までわが国ではごく当たり前のように行われていた。円形の卓袱台を囲んでの食事風景は、その典型である。父親は一家の大黒柱という考え方も、この図式から出たものではなかろうか。

第四回目は台所に関するもので、竈の話からスタートし、次に「冷やす」という行為を冷蔵庫の歴史から探り、わが国の氷室と比較した。その中で、奈良の氷室神社の祭りなどローカルな行事も紹介し、フィールドワークする機会を与えることも怠らなかった。

### (V)

### 第五回: 文学の異文化—短詩の世界

資料: 世界中のいかなる民族も、小説、詩、劇など多岐に渡るジャンルの独自の文学を持っている。文学とは、いわば嘆き、悲しみ、喜びといった人間の喜怒哀楽の表現である。古代人は高等な知能を得るや否や、自身の心情を吐露したり、思索の過程を寓意的に物語る必要性を感じたに違いない。それがやがて文学作品として発展した。文学作品は、現実にはこのようなことはあり得る、起こり得るような題材を取り扱う。しかし、たとえ具体的な人名、地名が登場したとしても、それ

はあくまで架空のものでなければならない。実在する人物や地名、そして実際に起きた事件が取り扱われるなら、それは単なるニュース記事である。文学はあくまで、現実の模倣 (mimesis) である。現実そのものではない。人はこのような文学作品を読むことで、精神的な癒しを得る。ハッピーエンドな内容の作品のみならず、悲劇的な作品にも、人に一抹の満足感を与えるものが存在する。結末で主人公が絶命する悲劇では、外面の悲しさとは裏腹に、主人公の死後も読者を浄化するようなムードが漂う。これをカタルシス (katharsis=瀉血。アリストテレスは、悲しい場面で人が涙を流したり、恐怖感にさいなまれると、心の中のしこりが癒されると言った) と呼ぶ。

文学の様々なジャンルの中で、最も古くから存在するものは、韻文 (リズムや音の響きにこだわった言葉) による「詩」だといえる。中国では、西周のころ古代中国の歌謡を編纂したものを「詩」といった。それはやがて孔子により編集され「詩経」と呼ばれるようになった。儒教の世界では、易・書・詩・礼 (らい)、春秋の五種の經典が尊重されていた。もともと楽経があり、あわせて六経だったが、楽経は亡失したため五経となった。わが国では、明治以後西洋文学の影響が次第に濃くなり、「新体詩抄」(1882年) などで「詩」の形式が使われ始めた。詩は、主として感情の吐露であるため、概して散文よりも短い。だが、物語を詩の形式で滔滔と語る作品もあり、そういったものはかなり長大なものである。

詩は一種の音楽である。音楽である限り、詩を創作するに当たりリズム、音の響き (ハーモニー) は無視できない。ここで、それを裏付ける恰好の例を紹介する。

A slumber did my spirit seal,  
I had no human fears:  
She seem' d a thing that could not feel  
The touch of earthly years.

No motion has she now, no force;  
She neither hears nor sees;  
Roll' d round in earth' s diurnal course  
With rocks and stones and trees!

眠りがわたしの魂を封じたので、  
人間らしい恐怖感はなかった。  
乙女は地上の歳月の流れを

感じない存在のようだった。

いま彼女は微動だにしない、力もない、  
耳も聞こえず眼も見えない。  
地球の日ごとの運行につれて、  
岩石や樹木と一緒に回転している。

(宮下忠二 訳 大修館書店)

これは、William WordsworthのLyrical Ballads 1800年版に収められている大変有名な小品である。作品に登場する「乙女」はもはやこの世の人ではない。とりわけ二つ目のスタンザでは、No, motion, now, force, nor, Roll' d, round, diurnal, rocks, stones などと、重苦しい響きを持った言葉が多用されている点からも、この作品全体には重々しい憂鬱なトーンが流れている。しかし、作品の最後でtreesが登場し、[i:] という甲高い音をかもしだす。それは上昇のイメージを与えるが、生命のシンボルである木とオーバーラップして、この場に至って「彼女」の魂が無事に天国へ上ったことを告げようとしたかのようなのである。即ち、この作品では、結末で永生のイメージがかもしだされる。「詩」の響きは、従って原語でしか味わうことは出来ない。他国語に訳せば、言葉の響きは全く変化してしまう。概して、恋愛詩では、甘ったるい雰囲気壊すような無粋な響きを出してはならない。例えば、overのvは詩の中では敢えて省略され、o' erのようになる。beforeのbも音が強すぎる場合、ereという語を用いる。ただし、日常会話でこのような単語を用いてはならない。

ついでながら、上で引用した作品の各行末を見てみよう。最初のスタンザでは、seal, fears, feel, yearsとなっている。法則性に気付いたかもしれないが、一行目と三行目、二行目と四行目の音が類似していることがわかる。第二スタンザでも同じことが言える。これを脚韻 (rhyme) と呼ぶ。こうすることにより、詩にリズムを与える。詩人は作品を創作する際、韻を十分に意識しながら単語を選ばなければならない、そのような用向きに辞書もある。

日本語では、七五調の文体が古来好まれている。この文体は大変歯切れがよく、とりわけ時代劇のナレーションにはなくてはならないものだ。カラオケで愛唱される演歌の歌詞にも七五調が多いのにおどろく。民謡とて同じである。

酒は飲め飲め 飲むならば  
日の本一の この槍を



飲み取るほどに 飲むならば  
これぞまことの 黒田武士

余りにもポピュラーな黒田節は福岡県の民謡である。上に引用したのはその一番目の歌詞であるが、見事に七五調が守られている。音楽関係者の常識として、この歌詞でTV時代劇水戸黄門のテーマ曲が歌え、また童謡「どんぐりころころ」も歌える。即ち、これらの曲の歌詞は完全に七五調なので、互換性がある。リズムを持った言葉（韻を踏むという）には、このように不思議な性質があるが、よく考えると不思議ではなくなる。

→他の七五調の歌詞を探し、メロディーを換えて唄ってみよう。

ありふれた日常語を韻文に換えると、それを聞く者は神秘的な気分を喚起され、益々傾聴させられてしまう。仏教の経典、神道の祝詞などは、全て韻文である。これにより、信者たちの信仰心をいやがうえにも高め、神仏という超越した存在に対して畏怖の念を抱かせることは容易になる。演劇が盛んであった古代ギリシアでは、特に悲劇の上演に際して、舞台上に合唱団コロス（chorusの語源）が登場した。そして、物語が盛り上がりを見せる場面でコロスの面々は、抑揚のある言葉によりバックアップを行った。無論観客の感情移入はただならぬもので、観客席のいたるところから一種うめくような声が聞こえてきたであろう。

### 情報の圧縮：短詩

コンピュータがあまねく普及した現在、情報の圧縮が重要になっている。つまり、極力小型のメディアになるべく大量の情報を詰め込む技術を競い合っているのが現状である。フロッピーからCD、更にDVDやブルーレイDVDと枚挙に暇がない。大容量の静止画像を圧縮するために、JPEG（Joint Photographic Experts Group）なる方法が開発され、また動画や音声はMPEG（Moving Picture Experts Group）により、圧縮記録されるようになった。文学の世界でも古の昔から、人々はなるべく僅かな言葉に、自身の心情を託するわざを培ってきた。それは西洋では、ソネット（sonnet）という形式を生み出したのだ。sonnetのsonは英語のsongつまり「歌」の意であり、netは縮小辞として働き、「小さな」という意味である。従って、さしずめ「小歌」といったところであろうか。ソネットは、イタリアのシチリア島で生まれたといわれているが、ルネサンス期にペトラルカがこの形式を発展させたことは知られ

ている。ソネットは全体が14行から成り立ち、ヨーロッパでは最も短い詩である。（資料参照）

### ペトラルカのこと

ソネット形式を発展させたペトラルカ（Francesco Petrarca 1304—1374）は、イタリアのアレッツォ生まれ。ペトラルカというのはラテン語式の名前で、イタリア語ではFrancesco Petrarcoである。1341年彼は桂冠詩人（poeta laureatus）になる。彼の作品は、意中の女性で人妻のラウラに寄せた、207編のカンツォニエーレ（Canzoniere）と題された詩集が最も有名である。そしてこれらのカンツォニエーレはソネット形式で書かれている。ラウラとは、人妻であったとされるが、実在の女性ではないという説もある。人妻という恋の実現が不可能な相手に対し、ひたすら自身の心中を告白し続けるというのは、古典期のラテン詩では常套手段だった。実現不可能な恋ほど尊いものである。ソネットの原型は、シチリア島の民謡に由来するといわれているが、その形式を完成したのがペトラルカである。やがてソネットは、イギリスにも伝えられ、エリザベス朝のソネット詩人たち（sonneteer）に随分もてはやされ、彼らは数々の傑作を生み出した。

→イギリスのソネットの資料参照

### 日本の俳句

俳人松尾芭蕉の代表作からはじめる。

閑かさや 岩にしみいる 蟬の聲

この作品は、最初「山寺や 岩にしみつく 蟬の聲」となっていた。しかし、「山寺や」では、この句が作られた立石寺の面影が根強く残り、余りに特殊なシチュエーションをイメージさせる。次に作品は、「淋しさや 岩にしみこむ 蟬の聲」に変えられた。ここでは、「寂しさ」が極めて感傷的に感じられ、それが岩に「しみ込む」のだから、作者の主観的な自我が邪魔になる。最終的に「閑かさや」に変わることによって作品は客観性を帯び、「岩にしみいる」ことには、作者の自我の働きはまったく感じられなくなり、ここでこの作品に普遍性が与えられることになったと解釈されている。静かな山寺で、蟬の鳴き声がうるさいほどに聞こえてくる。おそらくその場には、作者だけが独りでたたずんでいるのだが、しかし、蟬の鳴き声はまるでムクの『叫び』のように、空間全体をつんざくように響き渡り、読者の耳にもうるさく聞こえてくるようだ。一

匹の蟬の鳴き声がそれほどまでにうるさく聞こえるとは、言い換えるとあたりの情景が余りにも静寂の中にあることを意味する。五・七・五のたった17文字で作られる俳句は、このようにstaticな面と同時にdynamicな側面も持ち、そのパワーの潜在性は驚くべきものである。美辞麗句を尽くして表現した散文では、とても太刀打ちできないほどの優れた表現力である。芭蕉の名句をもう一つ。

古池や 蛙飛び込む 水の音

第五回目では、再び自身の得意とする文学の話に戻った。最初に「詩」の持つ音楽性を強調しつつ、詩と散文の違いについて説明した。その際、わが国の七五調の歌詞を取り上げ、同じく七五調が厳格に守られて書かれた歌詞間では互換性がある点を指摘した。更に、最先端のITに付物の情報圧縮という点から、ヨーロッパと日本の最も短い詩、即ちソネットと俳句を説明し、17文字に計り知れない思想を凝縮した俳句の素晴らしさをあらためて強調した。

#### (結び)

英語担当教員が、自身の専門と生活文化学科の必修科目が要求する内容とを巧みに絡み合わせた結果、上のような講義ノートに沿った授業を展開することが出来た。海外渡航経験が豊かなお陰で、私は単に専門とする文学の知識のみならず、各国の生活文化面にも深く関心を抱くようになり、とりわけ海外のキッチン、トイレ、バスルームなど「住」にまつわる分野や、海外の料理、飲み物などの「食」に関する分野に対しても、旺盛な知識欲を示してきた。授業中あらゆる機会を利用して、このような情報を学生に紹介するよう努めている。それがインセンティブとなり学生の興味を引き出し積極的な学習意欲を持ってくれるようになれば、それ以上に求めるものはない。

話が変わるが、自身が担当する異文化理解のクラスでは、「祭り」をテーマとして、ヨーロッパと日本の祭りを比較検討している。普段は講義中心だが、実習も取り入れ祭りにつきもののお菓子作りを行っていて、学生の評判が大変良い。その際、余り手の混んだ製菓実習では失敗のリスクがあるため、「いつでもどこでも」をモットーに、手軽に出来て楽しめるタイプの菓子作りを心がけている。工夫次第でクラスは大いに

活気付くものである。

大学教員は、各自が専門とする分野を持っていることは言うまでもない。しかし、その専門分野が現代では余りに専門化特殊化されてしまったため、フレキシビリティが乏しくなり、それが改組転換にあたり大きな妨げとなったともいえるのではないか。改組転換は、教員の持つ意外な可能性に自己啓発されるチャンスとも考えられる。